
銀の勇者と金の王

柚木

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の勇者と金の王

【Nコード】

N2764BA

【作者名】

柚木

【あらすじ】

勇者として召喚されたが女だからというだけで命を狙われているらしい。

協力者の力を借りながらお隣の国に亡命を目指しての逃亡生活。神様の加護で使えるようになった魔法で男の姿になってカモフラージュもばっちり・・・？

文章の練習用に書いてます。読みづらい部分が多いかと思います。更新頻度もその時の気分に左右されがちです。

それでも生暖かい気持ちでお付き合いくださると嬉しいです。

はじまり

気がついた時にまず目に入っただのは見慣れない天井だった。
少し痺れが残る頭を振り、意識を覚醒させ現状を確認する。

少し体に痺れはあるが動けないほどではない。
服装は記憶にある通りの喪服代わりの制服。

「確か・・・お墓参りに行って・・・」

そう、私はお墓参りをしていたはずだった。

+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +

物心ついた頃に両親が事故で他界してしまい、私と兄は母方の祖母に育てられた。

両親がいないことは寂しかったが、祖母の愛情に包まれて十分幸せな日々を送っていた。

しかしそんな些細な幸せも長くは続かなかった。
それは私が十歳になってすぐの事。

ある日、忽然と兄が消えた。

祖母が搜索願を出し、自身も必死で兄の行方を探していた。
しかし兄は見つからなかった。

行方不明になる直前の足取りさえもわからなかった。
もちろん私も探したが、やはり兄は見つからなかった。

それから色々であった。

嬉しいことも、悲しいことも。

それらを全部、祖母と差さえあって生きてきた。

兄がいなくなつて七年。

兄の失踪宣言が成立して正式に兄の死亡が認められた。

本当は生きていて欲しい。

でも今のままじゃ前に進めない。

兄を見つけることは諦めていないけれど、それをひとつの区切りとして受け入れた。

「これから新しいスタートだね」と言うと、祖母も少し悲しそうに微笑んだ。

その日の夜、静かに祖母は泣いていた。

それから数日後、祖母が倒れた。

今までずいぶん無理をしてきた祖母。その無理がたたつたのだろう。
あつという間に祖母は両親の元へと旅立ってしまった。

「翡翠のこと諦めないでね」

最後にそうやさしく微笑んで。

祖母が旅立ってからとはにかく泣いて、泣きはらして、やっと落ち着いた頃にお墓参りに行く決心をした。

小高い海に面した丘にお墓はある。
季節は春。日差しが心地よい日だった。

きれいにお墓の手入れをして、ふうと空を仰ぐ。

春とはいえお墓の手入れは重労働で、うっすらと汗が滲んでいた。

ざああっ

心地よい風が吹き抜けた。

海に面したこの場所は風の通り道になっている。

風がない穏やかな日だったけれど、この場所は例外なのだ。

ふと違和感を感じて視線をあげると、太陽がその輝きを増したように見えた。

そして次の瞬間、ありえない突風に襲われた。

地面から足が離れる浮遊感。

白く霞む視界。

ずきずきと激しく頭が痛む。

わけがわからなくて、痛みで思考も麻痺してきて。

ふと人の声が聞こえた気がしたけれど、その言葉を理解することもできなかった。

理解しようという気すら起こらないほど思考は麻痺していた。

召喚された少女

そして今のこの状況に至る。

周りを見回してみても見覚えがない場所だ。

それどころかなんだか高そうなアンティーク調の家具が並んでいた。

あの突風に飛ばされて気を失ったところを通りかかった裕福な人にも助けられたといったところだろうか。

落ち着かないし早めに家主にお礼をいって失礼しようかと思案していると、コンコンと控えめなノックの音がした。

「お目覚めですか？」

「あ、はいっ」

「では少々失礼してもよろしいですか？」

「もちろんですっ」

とつさのことで思わず声が上ずったがそれが仕方のないぐらいの美声だ。

慌てて佇まいを正して声の主が入ってくるのを待つ。

「ご気分はいかがですか？」

ゆっくりと静かに部屋に入ってきたのは、流れるような蒼の髪が印象的な青年だった。

しかしいわゆる美形と呼ばれる人種である青年は、白いローブとい

う奇妙な服装だ。

そもそも髪が蒼という時点で奇妙すぎる。

いくら日本人の顔のつくりとはかけ離れた外人さんだからといって天然で蒼い髪というのは聞いたことがない。

これはちよつとオタクな友人が言っていたコスプレ趣味の残念な美形というやつだろうか。

それはさておき、助けてくれたことに間違いはないだろう。

「えっと、ちよつと痺れたような感覚はありますが大丈夫です。助けていただいてありがとうございます」

私がそう言つと、彼は髪と同じ蒼の瞳を細めて微笑んだ。すべてを見透かされているような気分させる、そんな瞳だった。

「少しだけ失礼しますね」

彼はそう言つて私の右手をとる。

かあつと顔に熱が集まるのがわかった。

しかしそれも次の瞬間消えてなくなつたのだが。

私の手に重ねた彼の手を中心に、淡い光が溢れた。

私はその光景をただ呆然と眺めるしかできなかった。

「いかがですか？」

そう言つて彼が手を離して、やつと正気に引き戻された。

彼の言葉の意味が分からずに首を傾げれば、さっきまで動かすたびに感じた痺れが消えていた。

「・・・痺れが消えました」

「それはよかった」

「ありがとうございます」

未知の出来事に驚きを隠せずに、それでも不思議と怖いと感じることとはなくお礼を伝える。

そして少しずつ、感じる違和感が大きくなっていく。

手から光が生まれて体の痺れが消える。

そんな治療方法を私は知らない。

チラチラと頭を過ぎるのは少々オタクな友人と付き合いで一緒にプレイしたゲーム。

剣や魔法が出てくるファンタジーものだ。

つうと背中を冷たいものが伝う。

目の前の青年も残念な格好の美形な外人さんなどではなく、これが普通なのだとしたら？

残念なのは私の頭のほうではないだろうか。

「申し訳ありません。すべてはこちらが悪いのです」

そう言つて青年は膝をつき、頭をさげた。

何だか嫌な予感しかない。

ぎゅ、と手に力を入れて私は彼の言葉を待つ。

「すでにお気づきかもしれませんが、ここは貴方のいらした世界ではありません。いわゆる異世界という場所にあるアルメイサンとい

う名の国です」

膝をつき、頭を下げたままの彼が苦しそうに告げる。
表情は見えないが、その言葉に嘘は感じられない。

「・・・・・・・・」

そんなことすぐに信じられるわけもない。

でもそれが彼の狂言だと断言できないのも事実。

「あの、さっきの光は・・・」

「あれはリヒトの加護による治癒魔法です」

「魔法ですか・・・私のいた場所には魔法なんてありませんでした」
魔法なんて、私の暮らしていた世界にはなかった。

でも現にその魔法を目の当たりにして、その効果も実感してしまっ
た。

あれは手の込んだ手品でこれがドッキリだといえないこともないが、
そもそも私にこんな大掛かりなドッキリを仕掛けて誰にメリットが
あるというのか。

「そうですか・・・この世界でも魔法が使える人間は少数です。そ
れについては後ほどご説明しましょう」

「はい」

「それでは遅くなりましたが・・・。私はこの国の神官長を務めて
いるアルファルドと申します。アルとお呼びください」

「私は葉山瑠璃といいます。瑠璃、が名前です。よろしく願います、アルさん」

慌てて名乗り、ベッドに座ったままだったがペコリと頭を下げる。するとアルさんは少し困ったように笑う。

「私のことはアル、と。貴方は勇者様なのですから」

「は・・・？」

ユウシャ・・・？

今アルさんは勇者と言った気がしたがきつと聞き間違いだろう。私が勇者だなんてありえない。

ちょっとオタクの友人に見せてもらった本にこんな設定の話のものがあつたが、それはすべて作り物であり娯楽用。

実際に自分がその立場にならないから楽しめるのだ。

それでもあの友人なら自分の身に降りかかったとしても、小躍りして喜んだりするのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2764ba/>

銀の勇者と金の王

2012年1月7日01時47分発行